

経済・金融 フラッシュ

マレーシア 4-6 月期GDP: 前年同期比+5.4% ～「本物」の内需主導による成長が見えてきた

経済調査部門 研究員 高山 武士

TEL:03-3512-1824 E-mail: takayama@nli-research.co.jp

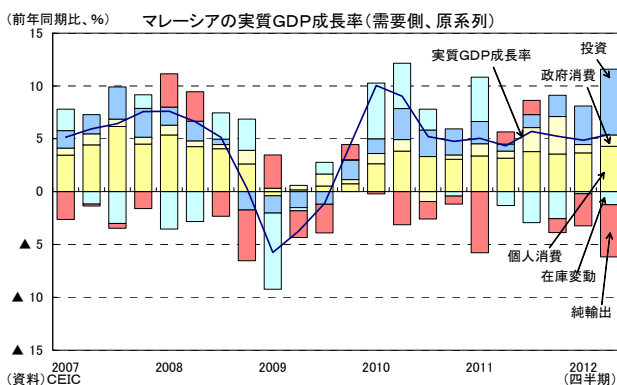
1. 現状:投資中心に内需が堅調

マレーシア統計庁(DOSM)は8月15日に2012年4-6月期の国内総生産(GDP)を公表した。実質GDP成長率は前年同期比(原系列)で5.4%の増加となり、1-3月期の前年同期比+4.6%から成長が加速したことが明らかになった。

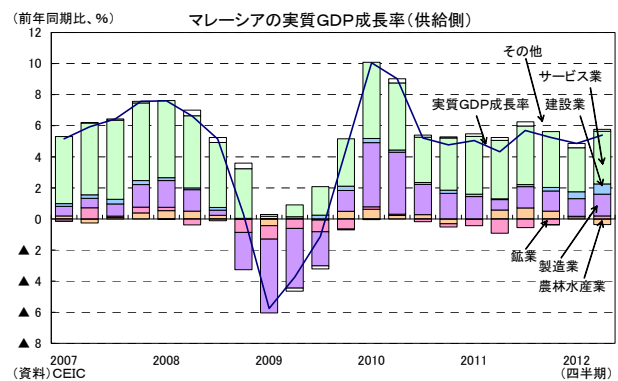
成長率の内訳を需要項目別に見ると(図表1)、内需の強さが顕著に表れている。特に投資は4-6月期に前年同期比+26.1%と1-3月期(同+16.1%)から大きく加速した。官民の投資がともに堅調で、民間投資ではサービス産業やエネルギー産業、製造業を中心に前年同期比+24.6%の高成長を記録、公共投資も前年同期比+28.9%の大幅増となった。また、個人消費についても、4-6月期は前年同期比+8.8%と1-3月期(同+7.4%)から加速、堅調さを維持している。

輸出については、4-6月期は前年同期比+2.1%と1-3月期(同+2.8%)の伸びを若干下回った。その一方で、輸入は内需の強さを反映して前年同期比+8.1%と1-3月期(同+6.8%)から加速したため純輸出の成長への寄与で見ると▲4.9%ポイントと大幅マイナスとなった。

(図表1)



(図表2)



供給側(図表2)を見ると、建設業の寄与の拡大が目立つ。4-6月期の伸び率では前年同期比+22.2%と1-3月期(同+15.5%)を上回り、2期連続の2桁成長を記録している。また、主要産業のサービス業と製造業も好調で、それぞれ前年同期比+6.3%、+5.6%となり、1-3月期(同+5.3%、4.4%)から加速、成長率の押し上げ要因となっている。農林水産業はパーム油の収穫低迷などで前年同期比▲4.7%とマイナス成長に転じたが、成長への寄与で見るとそれほど大きくなく、全体として見れば好調と言って良いだろう。

2. 「本物」の内需が活性化

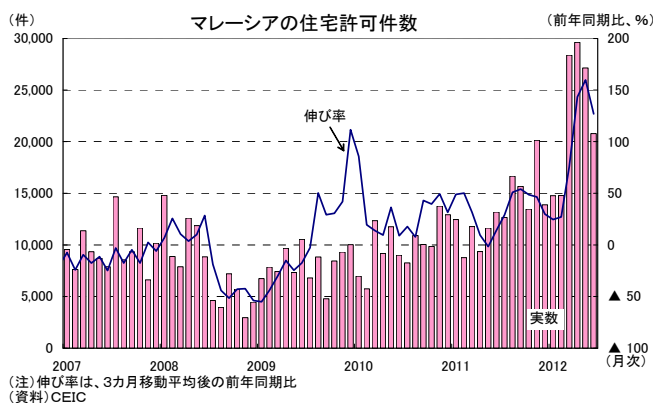
世界経済が減速傾向にあるなか、マレーシアの成長率が加速している要因としては、建設需要が顕在化してきたことと、予想以上に輸出が底堅かったことが挙げられるだろう。

建設需要に関しては政府主導の投資振興策であるE T P（経済改革プログラム）として新規案件の追加や投資準備が進んでいるが、以前から取り組んできたインフラ、公益、エネルギー事業で大詰めを迎えている大型案件も少なくない¹。こうした案件への投資が、建設業の活性化や需要増につながっていると言える。また、良好な景況感を背景に、個人でも高級物件を中心に住宅投資を行なう人が増えている。住宅投資については、4-6月期に住宅許可件数が大きく増加しており（図表3）、今後も底堅い成長が見込まれる。

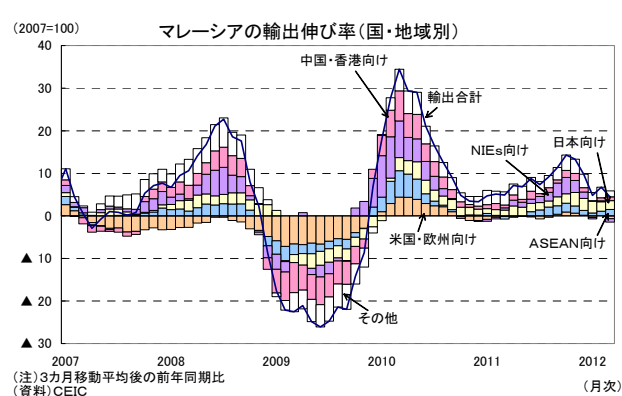
輸出は冴えない状況にあるが、大幅減速は避けられている。世界経済の鈍化を受けて、工業製品や電子機器の需要は減速しているものの、資源国であるマレーシアでは、一次産品、特に燃料や鉱物に対する需要が見られる。地域別には欧米先進国や中国向け、また韓国や台湾などNIEs向けの輸出は鈍化しているが、ASEANや日本向けの輸出は底堅く推移している。この理由としては、ASEANにはインドネシアやフィリピンのように世界経済が低迷していても、内需が強く、成長を維持している国があること²、また日本では火力発電燃料に対する需要が高まっていることが考えられる。こうした国に対する資源輸出の底堅さは、国内の石油化学製品の生産加速にも寄与しており³、内需の下支えにもなっている。

輸出の動向については、世界経済の成長が鈍化しているだけに、依然として下ぶれリスク要因となっていることには変わりない。しかし、民間企業の投資や個人消費が活発化し、成長減速に歯止めがかかったことは、大きなプラス材料と言える。今までは、政府の経済支援策が成長を下支えしてきた側面も大きかったが、足もとでは民間資本を中心とした、いわば「本物」の内需が活性化しつつある。これは、今後の高成長期待につながる、好感すべき結果と言えるだろう。

（図表3）



（図表4）



¹ 中央銀行は具体的に、ペナン第2大橋建設、マレー鉄道（セレンバン〜ゲマス間）複線化工事、ジャナマンジュン発電所、サバ石油ガスターミナル（SOGT）、マラッカ再ガス化ターミナル（RGT1）の完成に向けた工事が順調に進んでいることを建設投資の好調さの要因として挙げている。

² インドネシアは4-6月期のGDP成長率が+6.5%となり、内需の強さを背景に1-3月期から改善している。また、フィリピンは4-6月期のGDP成長率はまだ公表されていないが、1-3月期の成長率が前年同期比+6.4%と高成長を記録している。

³ 化学製品の4-6月期の生産指数は前年同期比+10.4%、石油製品は同+11.6%とそれぞれ1-3月期（同+9.1%、3.8%）より加速し、2桁成長を記録した。

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。